# 『真言伝』における浄蔵伝の形成について

佐藤愛弓

## はじめに

『真言伝』は、後に東寺長者ともなった真言僧栄海が、正中二年（一三二五）、四十八歳の時に編纂した全七巻からなる伝記集である。従来『真言伝』は院政期や鎌倉期の説話集や往生伝類との関わりに関心をもって読まれることが多く、『真言伝』固有の世界を読むという研究は、ほとんどされてこなかった。それは『真言伝』が先行資料に改変を加えることなく、単純に先行資料の本文を継承して叙述を進めているとみられていたためである。しかしこれまで『真言伝』の典拠となった『拾遺往生伝』や『本朝法華験記』などの往生伝類、『天台南山無動寺建立和尚伝』、『道賢上人冥途記』などと本文を比較した結果、『真言伝』は先行資料の記事を選択して採用しており、その選択には一定の基準があることがわかった。[1]

学侶の学問伝統からみるならば、先行資料の本文を改変させることなく、いくつかの先行資料の要文を並べ、並べることによって生ずる文脈から、自らの主張を表現するというのはむしろ一般的な方法である。このような方法においては典拠に改変を加えないからといって、先行資料の本文の主張を単純に継承しているということにはならない。

『真言伝』の跋文には「碑文、行状、傳、日記、物語等ノ中ニ、要ヲヒロヒテシルシ載侍リ」とある。ならば『真言伝』は先行資料のどの部分を「要」ととらえて取り入れ、どの部分を「要」ではないとして切り捨てたのであろうか。本稿では浄蔵の伝記を、『真言伝』がどのように描いているかを検討することによって、『真言伝』の規範とする高僧とはどのような存在であったのかを考察する。

三善清行の息、浄蔵の逸話はさまざまな説話集に見い出すことができる。死後数日を経ていた父清行を加持してこれを蘇生させたという説話は、『扶桑略記』、『拾遺往生伝』巻中、『日本高僧伝要文抄』、『撰集抄』などに

伝えられている。また一条戻橋の名前を清行蘇生説話に結びつけて説明する伝承は、『三国伝記』や『塵添壒嚢抄』に受けつがれ流布していった。

また菅原道真の霊に時平が苦しめられている時、浄蔵がこれを加持しようとするが、父清行がこれを諌めて加持を止めさせ、時平が死に至るという逸話は、『大法師浄蔵伝』、『拾遺往生伝』が伝えているが、後には『北野天神縁起』の諸本の中に取り込まれて流布してゆく。

そのほかにも、八坂寺に入った強盗が、浄蔵の験力によって動けなくなったとする逸話は、『江談抄』『古事談』『宇治拾遺物語』に伝えられてよく知られている。

『真言伝』の編纂された鎌倉末期には、浄蔵をめぐる説話はすでに多く流布していたとみられる。それらの説話が伝える浄蔵のイメージの中で、『真言伝』が選択して創り上げた浄蔵の人物像が、一体いかなるものであったのかを検討してゆきたい。

## 一

まず『真言伝』がどのような資料をもとに伝を構成したのかを検討する。『真言伝』に先行する浄蔵の伝の中で、『真言伝』の資料となりうるだけの情報量を持つ伝を挙げると、『大法師浄蔵伝』、『拾遺往生伝』、『扶桑略記』、『日本高僧伝要文抄』の四つの浄蔵伝がある。これに加え『大法師浄蔵伝』の奥書からは、現存しない広略二種の浄蔵伝が『大法師浄蔵伝』の典拠となったことが窺われる。また『拾遺往生伝』に別伝として示される伝についても不明な点が多い。これらの伝の相互の関係は複雑であるが、[2] いずれの浄蔵伝も『真言伝』より先に成立していることは確かであり、ここでは『真言伝』の考察が目的であるのでこれ以上立ち入らない。最も記事の量が多い『大法師浄蔵伝』によって、記事を要約し全体像を示すと表1のようになる。(P42表1参照)

『大法師浄蔵伝』、『拾遺往生伝』、『扶桑略記』、『日本高僧伝要文抄』の四種の浄蔵伝の内、『真言伝』がどの浄蔵伝に一番近いのかが重要となるが、『日本高僧伝要文抄』と『扶桑略記』についていえば、『真言伝』に載せられている以下の三つの話がないために、『真言伝』の典拠資料とはなりえない。

10　大恵法師にしたがって梵字悉曇を学ぶ。

13　京極の更衣の病悩を亭子法王の要請により、霊を捕縛して平癒させる。法王は法服を著して浄蔵を礼拝した。

22　醍醐内親王の腰の病を平癒させた。

そこで問題となるのは『大法師浄蔵伝』と『拾遺往生

伝』の内のどちらが『真言伝』に近いのかである。先にも述べたように現存しない二種の浄蔵伝も含めて『大法師浄蔵伝』と『拾遺往生伝』の本文の関係は複雑である。両者の本文はそれ自体が似通っているので明確にはしがたいが、『真言伝』は『拾遺往生伝』が持たない次の四つの説話を載せていることから、まずは『大法師浄蔵伝』の系統のものに拠っていると考えることができそうである。

20　三年を限り那智山に籠山する。

21　独古を送り玄昭律師の病を治す。

25　相応の助修をつとめ不動護摩を修していると、炉の炎の中に大聖明王が現れる。この大聖明王は相応と浄蔵以外の者はみることができなかった。

49　修入と験競べをする。浄蔵は「三宝の証にするため」と語り、石を飛ばし鞠のように上下させるなど、験力を発揮し人々を感動させた。

また父清行の蘇生の話（57）（以下同様に括弧内に説話番号を示す）は『拾遺往生伝』や『扶桑略記』、『日本高僧伝要文抄』にもみられるが、『真言伝』には『拾遺往生伝』、『扶桑略記』、『日本高僧伝要文抄』にはない次のような場面が描かれている。

浄蔵が清行を加持していると童子二人が閻魔庁に現れ、清行を返してほしいと訴えた。冥衆が断ると童子は猛火を吐く。冥官が驚いて死籍をけずり生籍を刻んで三日をゆるした。冥界での三日は人間界の三年にあたる。

この場面は『大法師浄蔵伝』と『真言伝』のみに共通するものであり、ここからも『真言伝』にもっとも近い内容を持つのは『大法師浄蔵伝』であるといえる。ちなみに「冥界での三日は人間界の三年にあたる」という解釈は『真言伝』では本文化されているが『大法師浄蔵伝』では割注のみに見られる記事である。

また『大法師浄蔵伝』と『拾遺往生伝』では、話の順番が大きく異なるが『真言伝』の話の順番は『大法師浄蔵伝』に一致する。

本稿では紙面の都合上、全体にわたる本文の比較を示すことはしないが、『真言伝』の本文の内容はすべて『大法師浄蔵伝』に含まれており、その点では『大法師浄蔵伝』を訓読、要約して『真言伝』の本文をつくることは一応可能である。

しかし『拾遺往生伝』は『真言伝』の複数の伝の典拠となっており、『拾遺往生伝』の伝を参照しつつ、これらの話だけを『大法師浄蔵伝』に拠った可能性もなくはない。それゆえ以下の考察は典拠の問題からはなれ

『大法師浄蔵伝』、『拾遺往生伝』のいずれと比較しても顕著な『真言伝』の記事の傾向を観察することにつとめた。

## 二

では『真言伝』は『大法師浄蔵伝』および『拾遺往生伝』からどのような説話を重要であるとして載せ、どのような説話を不必要であるとして省略したのだろうか。

まず『大法師浄蔵伝』の話題の中心は、最後に生涯を振り返るかたちでまとめてあるように、浄蔵が三度の礼拝を受けたこと（59）である。以下に三度の礼拝に関わる説話を示す。

13　京極の更衣の病悩を亭子法王の要請によって加持し、霊を捕縛することによって平癒させる。法王は法服を著して浄蔵を礼拝した。

15　玄昭律師が亭子院の御修法を修していたところ、真済僧正の霊が鵲となって炉壇にあらわれた。玄昭はその鵲を炉で焼き滅ぼすが、霊は玄昭に怨心をなし、小さな法師の形となってあらわれ、玄昭を病気にしてしまう。浄蔵は真済の霊を捕縛し病を平癒させる。玄昭は法服を着て浄蔵を礼拝した。真済は悪道をはなれることができたことを感謝し、兜率天で会うことを約する。

57　死後数日を経ている父清行を蘇生させる。清行は息子である浄蔵を位袍を着て礼拝した。

最初の礼拝は主君たる宇多法皇から、次の礼拝は師である玄昭から、三度目の礼拝は父清行から、いずれも死から身を護ってもらった事に対しての感謝としてなされている。浄蔵にとっての生涯の誉れであり、『大法師浄蔵伝』や『拾遺往生伝』のもっとも重視している業績であったと思われる。また『宝物集』（巻第五）には「浄蔵法師の験徳をあらはすと申は帝王・師・父三人に験徳をほどこして、おがまれたりとて申侍るめる」とあり、この話が流布していたことが窺われる。しかし、『真言伝』では玄昭の礼拝の説話（15）が省かれており、二度の礼拝しか記されていない。この説話は真済の霊に憑かれて悩まされていた玄昭律師を助けた話であるが、次の現象を視野に入れると、『真言伝』にこの話が載せられていないことは、編者の意図的な選択と考えてよいだろう。

以前拙論で触れたとおり[3]、『真言伝』巻四の相応伝には「霊に悩まされていた染殿后を相応が加持したときに真済の霊を捕縛した」とする説話が紹介されるが、『真言伝』はこの説話に「この伝は誤まりである」という私

見を付している。そしてその傍証として『清行卿記』（佚書『善家秘記』であるとされる）の金峰山上人の霊の説話を引いて「染殿后に憑いていたのは金峰山上人の霊であって真済の霊ではない」と主張しているのである。巻四の相応伝の記事からは、当時広く伝承されていた真済が死後天狗となったとする説を『真言伝』が強く拒否していることが窺える。また『真言伝』巻四には「真済は空海の直接の弟子であり、唐に渡る途中、悪風にあって船が難破し二十五日間海中に漂っても、光明に照らされ生き抜くことができた」という奇瑞が記されており、これは真済を称える文脈である。

ここには『真言伝』の編者栄海の真言僧としての立場が表れており、その立場から『真言伝』は三度の礼拝を敢えて不完全な二度にしても、真済の霊が鵲となって玄昭律師に憑いたとする説話を受け入れるわけにはいかなかったのだと思われる。改めて『真言伝』の編纂に真言密教の教団の一員としての立場が貫かれていることを確認できる。

## 三

また『大法師浄蔵伝』や『拾遺往生伝』には、先に挙げた三度の礼拝の記事の他にも、浄蔵が人々の病悩を平癒させたことや、死者を蘇生させたことが記されており、浄蔵のような宗教者の活動を窺い知る良い材料となっている。このような浄蔵の側面は『真言伝』ではどのように受容されたのであろうか。先に挙げた京極更衣の話と清行の話の他にも『真言伝』には以下のような治病説話が採り入れられている。

22　勅命により醍醐内親王の腰の病を平癒させる。

52　唐の高僧長秀の病を平癒させ、唐にもこのような験者はいないと長秀を感心させる。

しかし詳細に比較すると、醍醐内親王の腰の病の治癒の説話（22）に関しては、『真言伝』は次のような場面を削除していることがわかる。

22　勅命が下ったのは浄蔵が三年の籠山修行をしている途中のことであった。それゆえ浄蔵はなかなか従わなかったが、勅命が三度に及んだため仕方がなく応じた。

「籠山修行を志し勅命を断る」という場面を『真言伝』は省略しているのである。この傾向は、以前拙論で検討した[3]『拾遺往生伝』や『天台南山無動寺建立和尚伝』との比較においてみられた傾向とも一致するものである。典拠となった先行資料には、道心堅固な高僧が、貴人の加持を行って名声を上げることを厭い、籠山修行を志し

て勅命を断るという場面があっても、『真言伝』はそれらの記事を省き、験力の功績のみを強調していく。それは結果として典拠とはまったく逆の性質を持つ人物像を描き出すことになるのである。

また先に挙げた『真言伝』が載せている浄蔵の治病説話は、勅命による貴人の病や、異国の高僧の病の説話である。しかし『大法師浄蔵伝』や『拾遺往生伝』における浄蔵はこのような国家的な治病ばかりを行う僧として描かれている訳ではない。

以下に『大法師浄蔵伝』にありながら『真言伝』には載せられていない浄蔵の治病説話を挙げる。

34　浄蔵が丹治坂の下人の家に泊った時のこと、女が泣き悲しんでいるので訳を訊くと家の主は腹中が張満して三年もの間苦しみ、死んで三日になるという。浄蔵が護法に腹を踏ませたところ、腹から汚穢のものが出て家の主は蘇生した。

48　悪瘡におかされ医師に見捨てられて四条河原の屋形に捨てられていた病婦がいた。浄蔵が十二夜叉呪を誦したところ瘡根はことごとくぬけ、病婦は平癒した。

54　女人の顔にできた瘡を加持する。

『大法師浄蔵伝』における浄蔵は、このように庶民への慈悲行としての治病をも行う存在だったのである。さきほど挙げた『真言伝』に載せられている説話と比較する時、浄蔵の験力によって助けられる人物の身分の違いは歴然としている。また「坂の下人」「四条河原」といった場や、「汚穢のものが腹に張満する病」、「悪瘡」、「瘡」といった病が、当時の差別観に照らし合わせると明白な負の要素を持つものであることも見逃せない。『大法師浄蔵伝』における浄蔵は、このような負の要素を背負った者達とも交流し、験力を施すことを辞さない僧として描かれているのである。このような要素のいずれをも『真言伝』は継承することがない。

南里みち子氏は浄蔵の宗教活動の重要な要素として「済世利民・救療」を挙げ、「浄蔵伝に散見する治病の説話についてみると、浄蔵には、貴顕に交わり、怨霊調伏に法験を示す高僧としての面と、衆庶を憐れんで加持祈祷に効験をあらわす医師としての面の、二つの面があることが明らかである」と述べておられる。[5] 確かに『大法師浄蔵伝』や『拾遺往生伝』からは浄蔵のこのような活動を読み取ることができる。とすれば『真言伝』は浄蔵の一面だけを取り入れ、もう一方の側面を無視したことがわかる。ここから、浄蔵伝においても『真言伝』が、先行の伝を受容し編集する時にかけたフィルターが、か

なり偏向したものであったことが窺える。

また『大法師浄蔵伝』や『日本高僧伝要文抄』には積極的に載せられていた浄蔵の予知能力を示す説話も『真言伝』ではみられない。以下に『大法師浄蔵伝』にあって『真言伝』には載せられていない予知の説話を挙げる。

23 能浄君を見て、まもなく死ぬことを諸僧に示す。能浄君は門を出て乗車する間に頓滅した。

24 野中安行を見て、五品の兆があることを予言する。

39 朱雀院太上皇の御悩は早く平服するが、明年柏梁殿が焼亡する災があることを予言する。

40 亭子院の殿上法師寛修の背を見て久しからずして滅度することを予言する。一月後に寛修は逝去する。

41 仲算の師厳考の死期が近いことを予言する。厳考は十余日後に死亡する。

42 仲算の相をみて国宝となるべき貴相があるけれども齢三十七を過ぎることはなく、しいて延命を祈れば、四十二歳までは延ばせると予言する。仲算は諸山を周行し、四十二歳にして卒す。

このような予知能力も験者の不思議な力として認識されていたと考えられるが、それはやはり『真言伝』の重視するところではなかったようである。この現象と関わると考えられるのが、同様に『大法師浄蔵伝』にありながら『真言伝』には載せられていない次の説話である。

14 浄蔵が南院親王の除病のための修法を命じられたがしきりに辞退する。勅命に背きがたくて加持するが、弟子に親王は必ず死に至る病であると話す。修法三日目にして親王は死ぬ。浄蔵は不動火界の呪で蘇生させるが、「親王は定業であり定業は変えられない。法験をあらわすために蘇生させたが、四日の命である」と語る。親王は四日後に死ぬ。

この説話は、『大法師浄蔵伝』にさまざまに描かれている皇族の要請によって験力を施したとする説話の中で、『真言伝』に載せられていない数少ない説話である。しかし『真言伝』に入っていない理由は想像に難くない。ここにみられるのは、定業は変えがたい、または定業を変えてはならないとする思想であり、この説話では浄蔵は根本的には問題を解決し得ていない。予知の説話に関しても同じことがいえるだろう。予知の説話が強調するのは浄蔵の特殊能力であるが、それは同時に浄蔵の験力を持ってしても動かしがたい定業を強調する話でもある。『真言伝』は、このような説話を他の伝においても一切載せていない。『真言伝』にとっての真言呪力が、定業をもよく転ずべきものであったらしいことは、巻二に載せられている寿命陀羅尼の霊験説話から窺える。それは

「短命を予知する夢をみた男が、寿命陀羅尼によって命を永らえ往生する」という説話であり、『真言伝』が信じるところの真言の威力とは、定業をも能く転ずるものであったことが窺われる。

これらのことから『真言伝』が、固有の基準によって先行する資料から、新たな浄蔵伝を形成していることが窺える。それでは『真言伝』が重視した説話とはどのような性質の説話だったのであろうか。

さきにも触れた、修入と験競べをする説話（49）は、『拾遺往生伝』、『扶桑略記』、『日本高僧伝要文抄』のいずれにもみられないものであるが、『真言伝』ではかなり紙幅をさいている。この説話の中心は、触れることなく石を上下させて、人々を驚かせ感動させるという場面にあり、真言呪力の力を映像的に強調する説話である。『真言伝』はほかにも巻五で陽生と円賀との験競べの説話を載せており、験競べに対する関心の高さを窺うことができる。また『真言伝』に載せられている他の浄蔵の説話を見ていくと、次のような説話があることが注目される。

25　相応の助修をつとめて不動護摩を修していると、炉の炎の中に大聖明王が現れる。この大聖明王は相応と浄蔵以外の者はみることができなかった。

47　八坂寺に強盗が入った時のこと、浄蔵が護法に声をかけると、その言葉が終わらないうちに強盗達は地に臥して動けなくなる。浄蔵が許してやると盗賊は懺悔した。

50　八坂寺の塔が乾の方に傾く。上達部、殿上人等が王城の方に傾いていることを恐れ験力をもってこれをなおすように要請する。夜、浄蔵が露地に座して加持すると、露盤が動き、宝鐸が激しく鳴る。微風が起こって雷が鳴り天地が振動して四方が真っ暗になる。夜明けになって塔をみると塔はまっすぐになおっていた。

これらの説話はいずれも強烈な験力が、鮮やかに描かれている話であるといえるだろう。

また『真言伝』においては、浄蔵伝の次に『本朝神仙伝』を典拠とする藤太主源太主の話が位置していることも、浄蔵の験者としての力を浮かび上がらせる効果を上げている。内容は「吉野山に住み、羽なくして飛ぶという神仙性を有した藤太主源太主が、一本の木を切り、その上に浄蔵を乗せて氾濫する吉野川を渡した」というものである。この説話の中で、藤太主源太主は「普通の人であれば木の上に乗って氾濫した川を渡ることなどできない」と語って浄蔵を称えている。『真言伝』は、浄蔵

伝の後に、この藤太主源太主の説話を配置することで、浄蔵の修験的な験力をよりいっそう強調しているといえる。また、このように典拠の異なる説話を続けて記して、修験的な験力を強調するという編集態度は『真言伝』全般に亘ってみられる傾向である。巻五の日蔵伝についてもやはり後半に『本朝神仙伝』を典拠とする説話を載せており、その内容は、「土を掘って前世で埋めた鈴杵を得た」、「山の神が日蔵をとどめるために、行歩不能にした」といった山林修行者としての日蔵の姿を強調するものである。浄蔵伝と同様にやはり修験的な験者としての日蔵像を形成しているといえよう。

以上、『真言伝』における浄蔵伝についてみてきたが、真言密教の立場からの主張がみられることや、貴人への験力による貢献を強調していること、修験的な強大な験力を強調していることなどが判明した。このような記事の選択基準を通して『真言伝』は、独自の浄蔵像を創り上げているのである。

## 四

最後に、『北野天神縁起』にみられることで有名な、浄蔵の時平加持の話を『真言伝』が載せていないことについて考えてみたい。『大法師浄蔵伝』におけるこの説話の内容は「菅公の霊に憑かれて病気になった時平を加持するが、菅公の霊にたのまれた父清行が制止し、時平は死ぬ」というものである。これまでみてきた『真言伝』の浄蔵伝に所収されている話はすべて、浄蔵の験力が強調された話であり、中でも貴人への貢献を伝える話が積極的に載せられていたといえるだろう。しかしこの時平加持の話はどうであろうか。父の制止により加持をやめたところで、時平が死ぬということを、いままで時平が命を保っていたのは浄蔵の加持の力によるものであったとすれば、逆説的に浄蔵の験力が強調されてはいる。とはいえ、浄蔵は菅公の怨霊の脅威に対しては、結局何も解決し得ていない。この話はことの性質上、いままでみてきた『真言伝』の単純なほど華やかな験力を強調する姿勢とは、相容れない話であるということができる。また以前拙論[6]で述べたが、『真言伝』は巻五の冒頭の六つの伝に一貫して、菅公の霊やそれにつらなる将門純友の乱に関する説話を載せており、この問題に強い関心を抱いていたことがわかる。そしてその六つの伝のいずれもに、菅公の霊という王権の脅威に対して、修法の力をもって対抗し王権を守る密教の高僧を描いているのである。この場合の浄蔵が、そのような王権を守る高僧のイメージとかけ離れていることは明らかである。

## おわりに

本稿では『大法師浄蔵伝』や『拾遺往生伝』との比較をとおして、『真言伝』の浄蔵伝の特徴を考え、それが験力の強調にあることを確認した。その験力はある方向性を持ったものであった。皇族などの貴人のための加持をおこない、成果をおさめる説話を積極的に載せる反面で、「丹治坂の下人の腹中から汚穢のものを出して蘇生させる説話」や「悪瘡におかされ四条河原に捨てられた病婦の病を治す説話」や「女人の顔にできた瘡を加持する説話」のような当時の差別観に照らしあわせて、負の要素を持つ人々を救済する説話を載せていない。しかしこれらの『真言伝』が載せなかった説話は、浄蔵のある側面を語る重要な要素であったと思われる。通常ならば捨て置かれるような人々を憐れみ、自らの験力をもって助けたという『大法師浄蔵伝』における浄蔵は、差別観という境界を越え、死穢という境界を越えて人々と交わっている。その僧侶像は聖（ヒジリ）と呼ばれる民間宗教者に共通するものであった。その代表はいうまでもなく空也や性空であるが、彼らは一切の境界を越えて人々を救済する存在であった。それゆえに彼らは国家の中心的な構造には収まらない存在でもあったはずである。そのような側面の一切を『真言伝』は受け入れず、貴人との交わりにおいて発揮される験力のみを描いた。むしろ強大な験力を以って国家を支える存在として浄蔵を描いているのである。そしてこれは以前に拙論[7]においてみてきた『真言伝』の資料選択の傾向と共通する現象であった。籠山修行を志し、貴人からの加持の要請を厭い勅命ですらも辞退するという僧侶の姿を受け入れないことは三節に述べたとおりである。その他にも浄蔵伝における傾向と呼応する現象が、すでに判明しているので、以下にまとめる[8]。

- 『本朝法華験記』を典拠としている蓮坊伝からその尊敬すべき性格を示す「稟性素潔　正直白浄」を省略している。
- 同じく『本朝法華験記』を典拠としている慶日伝から「若持衣食有施与人　転施貧人自更不用」を省略している。
- 永観伝では、『拾遺往生伝』にみられる永観の慈悲深い性質をあらわす部分（永観が乞うものがあれば、衣鉢であっても惜しまず与えたことや、みずからが得たものはまず病人に与えたこと等）を省略している。

これらの現象は、いわば各伝で紹介されている高僧の、聖（ヒジリ）としてのあり方を排除する傾向ともいえるだろう。それに代わり『真言伝』で強調されているのは、護持僧、

験者としての僧達の姿であった。

すでに拙論で論じたことであるが、『真言伝』の編者栄海の著作の奥書を検討してゆくと、後醍醐天皇の王権護持に修法をもって貢献する真言僧栄海の実像が浮び上がる。[9] それは『真言伝』で強調される、皇族の要請に応えて験力を発揮する高僧のあり方に近い姿であるといえよう。また栄海は『二九秘抄』という宮中に祀られている二間観音の供養に関する聖教を著しているが、そこには栄海の王権護持に対する思想が生々しくあらわれている。[10]『真言伝』における記事選択の方向性は、栄海その人が生涯を通して目指した、王法を支える存在としての密教僧のイメージが影響していると考えられる。『真言伝』は、栄海の生きた時代のあり方や、彼の守ろうとした真言密教の思想が深く絡み合って、その必然から成り立ったと考えることができるだろう。

『真言伝』は、先行資料の抄出によって記事を構成し、僧伝の体裁に調えられている。そのため『真言伝』には固有の世界観が表現されていないように考えられてきた。しかしそれぞれの伝の形成過程を解きほぐしてゆくと、実際には強く自らの世界観を主張していることが判明していく。このような学侶の学問伝統における表現の方法をも視野に入れて読み解いていかなければ、多くの伝記や説話を育んできた文化的背景に迫ることは、できないのではないだろうか。

注

(1) 佐藤「『真言伝』における往生ということ」(『仏教文学』十九号、一九九五年三月)及び佐藤「『真言伝』における相応伝の形成について」(『唱導文学研究』第三集、三弥井書店、二〇〇一年二月)。

(2) 平林盛得「浄蔵大法師霊験考序説」(『聖と説話の史的研究』吉川弘文館、一九八一年七月)及び梁瀬一雄「浄蔵法師について」(『国学院雑誌』四九―四　一九六六年四月)稲垣泰一「浄蔵法師と「浄蔵伝」について」(『説話』一号、一九六八年六月)。

(3) 佐藤「『真言伝』における相応伝の形成について」(『唱導文学研究』第三集、三弥井書店、二〇〇一年二月)。

(4) (1) に同じ。

(5) 南里みち子「浄蔵止住の寺」(『怨霊と修験の説話』ぺりかん社、一九九六年十一月)。

(6) 佐藤「『真言伝』における仏法と王法―その宣揚の文脈について―」(『唱導文学研究』第二集、三弥井書店、一九九九年二月)。

(7) (1) に同じ。

（8）佐藤「『真言伝』における往生ということ」（『仏教文学』研究』三十二号、一九九七年六月）。十九号、一九九五年三月）。

（9）佐藤「栄海の著作活動としての『真言伝』」（『説話文学（同志社女子大学非常勤講師）

（10）（6）に同じ。

表1

全く同じ説話がある場合は○、一部内容が一致する場合は△、全くその話がない場合は空欄、『拾遺往生伝』に記された別伝にある場合は○別、△別とした。説話の区分は稲垣泰一氏の前掲論文に従い、要約は稲垣氏、南里氏のものを参照しつつ私に改めた。

なお『大法師浄蔵伝』は『続々群書類従』七を、『拾遺往生伝』は『往生伝・法華験記』（日本思想大系七・岩波書店）を、『扶桑略記』は『新訂増補国史大系』十二を、『日本高僧伝要文抄』は『新訂増補国史大系』三一を、『真言伝』は寛文版本と東寺観智院本を校合して用いた。

| | | 拾遺往生伝 | 扶桑略記 | 日本高僧伝要文抄 | 真言伝 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 釈浄蔵は俗姓三善、右京三坊の出身である。其の先は百済国の速古王である。父は参議従四位上守宮内卿兼播磨権守清行卿である。 | ○ | ○ | | ○ |
| 2 | 母が夢に天人が懐に入ると見て懐妊する。母は苦しみなく浄蔵を産む。 | ○ | ○ | | ○ |
| 3 | 二、三歳にして秀でほかの童に異なる。わずか四歳の時に千字文を読む。 | ○ | △ | ○ | |
| 4 | 七歳にして志は三宝にあり。普門品を習いて誦す。後に儒林を辞し、葛川の行人にあって修練し、家に帰らず。 | △ | △ | △ | |
| 5 | 八歳の正月、護法をして梅の枝を取らしむ。 | ○ | ○ | ○ | |
| 6 | 十歳にして葛川の本師と対論する。滝の水を逆流せしめ、飛ぶ鳥を落とす。 | | | | |

7 十二歳にして亭子法皇に見いだされ、玄昭について出家する。

8 十三歳でひとり稲荷山で苦行する。熊野紀伊に詣でた時には、護法が花を摘み、人の乗っていない小船が来る。また松尾社に夏安居の時には、護法が松の枝を折って来て、浄蔵の日用にあてた。

9 玄昭律師より三部の大法、諸尊の別法を授けられる。

10 大恵法師にしたがって梵字悉曇を学ぶ。

11 三ケ年横川に蟄居修行する。

12 あるとき壇主の施した袈裟を、侍者が口から火を吹いて焼いた。それは不浄の人が作ったものであった。

13 亭子法王の要請により京極の更衣の病悩を、霊を捕縛して平癒させる。法王は法服を著して浄蔵を礼拝した。

14 南院親王の除病のために修法を命じられたが、修法三日目に親王は死ぬ。浄蔵は不動火界の呪で蘇生させるが、親王は定業であり、法験をあらわすために蘇生させたが、四日目の命であると語る。親王は四日後に死ぬ。

15 玄昭律師が亭子院の御修法を修していたところ、真済僧正の霊が鵲となって炉壇にあらわれた。玄昭はその鵲を炉で焼き滅ぼすが、霊は玄昭に怨心をなし、小さな法師の形となってあらわれ、玄昭を病気にしてしまう。浄蔵は真済の霊を捕縛することに成功する。玄昭は法服を着て浄蔵を礼拝した。

16 独り大峯に入る。

17 正月廿八日葛木山に入る。

18 金剛山大谷にて自らの前世の屍をみつけ、これを火葬する。

19 二上窟で眠っていると、明王が現れた。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7 | 8 | | 9 | 10 | 11 | 12 | | 13 | 14 | | 15 | | 16 | 17 | 18 | 19 |
| ○ | △ | | ○ | ○ | ○別 | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | | | | |
| ○ | △ | | ○ | | | ○ | | | ○ | | ○ | | | | | |
| | | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | | |
| △ | △ | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | | | | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 20 | 三年を限り那智山に籠山する。 | | | | ○ |
| 21 | 浄蔵が那智山に参籠している間に、玄昭が魔に憑かれて病む。浄蔵が玄昭に独古を奉ると、その独古の護法が魔縁を降伏して、玄昭は回復する。 | | | | ○ |
| 22 | 勅命により醍醐内親王の腰の病を平癒させる。 | ○ | | | ○ |
| 23 | 能浄君を見て、ほどなく頓死することを諸僧に示す。能浄君は門を出て乗車する間に頓滅した。 | | | ○ | |
| 24 | 野中安行を見て、五品の兆があることを予言する。 | | | ○ | |
| 25 | 相応の助修をつとめ不動護摩を修していると、炉の炎の中に大聖明王が現れる。この大聖明王は相応と浄蔵以外の者は見ることができなかった | | | | ○ |
| 26 | 大原補陀落寺の供養の日、聴法のために会場に行くと、乗っていた馬が死んでしまった。法会が終わると、浄蔵は念誦して馬を蘇生させた。庵までつくとまた馬は死んだ。 | | | | |
| 27 | 寛空僧正と断金の契を結び寛空僧正のために護法をして香火を設けしむ。 | | | | |
| 28 | 寛空の為に不動尊を供養する時、真龍現ずる。 | | | | |
| 29 | 白山にて毒龍にあうが、神呪を誦して身を護る。その時持って帰った水を衆庶にあたえると人々の病は癒えた。 | | | | |
| 30 | 時平の加持をするが、菅公の霊が父清行に浄蔵の加持を止めさせるように願い、清行の制止によって加持を止めると、まもなく時平は死んだ。 | | ○ | ○ | |
| 31 | 法皇の勘当により首楞厳院に三年籠居する。 | | ○ | ○ | |
| 32 | 横川僧延豊が米を惜しんだことを、懲らしめる。 | ○別 | ○ | | |
| 33 | 竹生島参向のこと。 | ○別 | | | |
| 34 | 浄蔵が丹治坂下人の家に泊った時のこと、家の主は死んで三日を経ていたが | ○別 | ○ | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 35 | 浄蔵が護法に腹を踏ませたところ、腹から汚穢のものが出て蘇生した。 | 35 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 36 | 熊野詣の時、泥水をかけた騎馬人を護法をして落さしむ。 | 36 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 37 | 醍醐御宇の時、定額となり、仏名会に参勤し梵音頌を賞せられる。 | 37 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 38 | 仁和寺の桜花会で唄師を勤める。 | 38 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 39 | 将門調伏の話。灯明の上に将門が現れる。また天慶三年、将門の首が入京することを、予言する。 | 39 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 40 | 朱雀院太上皇の御悩は平服するが、明年柏梁殿が焼亡することを予言する。 | 40 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | |
| 41 | 亭子院殿上法師寛修の背を見て、久しからずして滅度することを予言する。 | 41 | △ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 42 | 一月後に寛修は逝去する。 | 42 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 43 | 仲算の師厳考の死期が近いことを予言する。厳考は十余日後に死亡する。 | 43 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 44 | 仲算の相をみて国宝となるべき貴相があるけれども齢三十七を過ぎることはなく、しいて延命を祈れば、四十二歳までは延ばせると予言する。仲算は諸山を周行し、四十二歳にして卒す。 | 44 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 45 | 天暦年中、定額第一となり仏名会に仏頌の妙を賞せられる。 | 45 | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 46 | 台嶺金輪院に住する時、成道寺、東光寺、長谷寺の焼亡を予言する。 | 46 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 47 | 同院において三時の行法を修する時、奇異を現ず。 | 47 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 48 | 長谷寺において正月導師を勤め、狂暴人を呪縛す。 | 48 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| 49 | 八坂寺に強盗が入る。浄蔵が声をかけると、その言葉が終わらないうちに強盗達は地に臥して動けなくなる。浄蔵が許してやると盗賊は懺悔した。 | 49 | ○ | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 悪瘡におかされ四条河原の屋形に捨てられていた病婦に会う。浄蔵が十二夜叉呪を誦したところ瘡根はことごとくぬけ、病婦は苦しみから脱した | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | 修入と験くらべをする。浄蔵は「三宝の証にするため」と語り、石を飛ばし | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 50 | 鞠のように上下させるなど、験力を発揮し人々を感動させた。八坂寺の塔が乾の方に傾き、上達部、殿上人等が王城の方に傾いていることを恐れ験力をもってなおすように要請する。夜、浄蔵が露地に座して加持すると、露盤が動き、宝釈が激しく鳴る。微風が起こって雷が鳴り天地が振動して四方が真暗になる。夜明けに塔をみるとまっすぐになおっていた。 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 51 | 横川において、慈覚大師の御経を拝見するを断念する。 | | | | | | |
| 52 | 唐の僧長秀の病を平癒させて、長秀を感心させる。 | ○ | ○ | | | ○ | ○ |
| 53 | 室内の鼠難を祈り去る。 | △ | | | | | |
| 54 | 女人の顔にできた瘡を加持する | | | | | | |
| 55 | 女人を白川寺の霊験豊かなる薬師に詣でしむ。 | | | | | | |
| 56 | 南山へ詣でる途中、父の死を知り、急ぎ帰る。 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 57 | 清行蘇生の話。童子二人が閻魔庁に現れ、清行をかえしてほしいと訴えたが、冥衆が断る。すると童子は猛火を吐く。冥官が驚いて死籍をけずり生籍を刻んで三日をゆるした。冥界での三日は人間界の三年にあたる。蘇生した清行は息子である浄蔵を位袍を着て礼拝した。 | △ | △ | △ | | ○ | ○ |
| 58 | 結文 | | | | | | |
| 59 | 三度（亭子院法皇、玄昭律師、清行）の礼拝の話、 | ○ | | | | | |
| 60 | 二人の男子をもったこと。 | ○別 | | ○ | | | |
| 61 | 羅什三蔵も二人の子持ったこと。 | | | ○ | | | |
| 62 | 天暦二年夏、本尊終期を示したるにこれを祈り延ばす。 | ○ | | △ | | | |
| 63 | 応和三年遷化。行年七十四。 | ○ | △ | ○ | | | ○ |